

# 保育者養成校における保育原理の授業改善の一考察 ～科目間連携を視野に入れた「つなぐ力」を育てる実践～

桑原 広 治

A study on class improvement for childcare principles  
at training schools for nursery-school teachers  
-Practice to develop “connecting power”  
with a view to inter-subject collaboration -

KUWAHARA Hiroharu

## Abstract

“Childcare Principles” is an “introductory” subject that covers all the contents of other subjects that are requirements for childcare worker qualifications and allows students to learn the basic ideas of childcare workers. This class will be developed by going back and forth between the field and each subject. However, many students are not good at thinking in relation to each subject and information. Moreover, in order for them to solve “questions that cannot be answered” in the limited time of two years, they are required to have the ability to think in relation to each subject. Unless they study at university with a sense of ownership, it is difficult for them to speak in their own words by making use of the childcare expertise they have learned.

Key words: class improvement, inter-subject collaboration, output, group work, human rights

キーワード： 授業改善、科目間連携、アウトプット、グループワーク、人権

## 1 問題の所在と研究の目的

本研究の目的は、現場で求められる「考える力」のつく授業改善を進めることである。短期大学における最大の課題は、2年間の短期間で実践力を備えた即戦力となる保育者養成を図ることである。中でも保育原理は講義型の科目で、保育士資格の要件となる他の科目の内容をすべてカバーしており、保育者の基本的な考え方を学べる「入り口」の科目である。ただ、多くの学生は各科目や情報等を関連させて考えることが苦手である。しかも、2年間という限られた時間で「答えの出ない問題」は、各科目などと関連させて考える力がなければ大学で学んだ保

育の専門性を生かして自分の言葉で語ることは難しいと考える。

ある学生が「先生、今度就職する園は、4年制大学卒業の人と一緒に入職します。少し不安です。」と述べた。

この不安の意味はどこにあるのか。短大教育2年間は、保育技術にかける比重が大きい。

2年後は、短期大学の卒業生だけでなく、専門学校、4年生大学など様々なキャリアを積んだ卒業生が同じスタートラインに立つ。まず、教員は4年生大学との違いを念頭に置きながら、短期大学の保育者養成を考える必要がある。

ともに、「基礎学力」「社会人基礎力」「専門知識」の育まれる比重が異なることにある。つまり、4年生大学は、「基礎学力」「社会人基礎力」「専門知識」を4年間かけて取り組むことができる。しかし、短期大学は、2年間で専門知識が中心のカリキュラムで実践力が同時に育むことが求められる。

ある学生は、「最近強く感じていることのひとつが、『教育がこの先の未来を創っていると言えるのかもしれない』ということです。そのように考えたとき、教育者を志す者としての責任の重さを感じると同時に、自分自身の力不足という現実に恐ろしさを感じます。短期大学での学びの難しさに直面していることもあり、本日桑原先生が仰っていたように『4年制の養成校が増えている』という点に、深く共感するものがありました。先程読んでいました乳児保育の教科書に、『子どもの成長に大きな影響を及ぼす立場であることも理解し、子どもと向かい合う覚悟をもって保育に携わっていく心持が求められます』と書かれておりました。『覚悟』なくしては到底務まらないのが保育者という職なのですね。」と述べている。

多田は「近年本学保育科の学生は学力と意欲の両面において格差がみられる。課題の意図を汲み取れずに適当に済ませる、保育者としての想像力に乏しい、みずから学びのサイクルを実施できないなどの学生も目立っていた。こういった学生は、これまでの学習生活の中で、みずから学ぶという経験や努力をして何かを達成した経験が少なかったのではないだろうか。もう一步踏み込んで言えば、そうならざるを得ない現状が学生たちの環境にあったとも言えるのかもしれない。もしそうであるなら、この学生たちは、教員側から適切な学びの環境やしかけを提供できれば、むしろ伸び代が大きく、可能性の高い学生たちであると言えるだろう。」(1)と述べている。(下線は筆者)

多くの短大生は、伸び代をもったまま入学してくるのではないかと。あるいは、自分には、もっと伸び代があることに気づかないまま入学してくるのではないかと。短期大学における学生の教

育は、「今、あなたがつまずいているところに気付かせることから始まる」という指導法を心掛けた。短大コンソーシアムの論文など短大の存在意義やこれからの在り方などいろいろ検討されている。しかし、実際には、4年制大学への流れが止まるわけでもなく(4年制大学がハードルを下げることで学生の数を確保しているため)短大の存在意義を確認してもおそらく、志願者が増えるとかではないと思われる。そのため、送り出す学生の質を4年制大学並みまたはポテンシャルを持つ学生に育てるといったことが狙いになってきていると考えている。

短期大学の今後の在り方によれば「短期大学の教職員の資質と能力の向上には、短期大学は、職業又は实际生活に必要な能力を育成することを目的とし、多様な学習経験を持つ学生にきめ細やかに指導することが必要となるため、教員に求められる能力は研究力以上に教育力が必要とされる。教育の質を確保するためには、短期大学独自の教員評価基準の設定や優秀教員の顕彰は、教育力の高い教育期間を標ぼうするためには不可欠であり、短期大学における教員の質の向上に関する検討は大きな課題である。」(2)と述べている。

本研究は、入学した学生のスタートラインを踏まえて学生理解に努め、筆者が主に担当する他の科目等(日本国憲法、言語表現、人間関係、保育・教職実践演習)の「科目間連携」と「逆引き学習法」で「考える力」を2年トータルで醸成する授業実践である。よって、各科目の授業では、関連する内容は一人ひとりの学生に寄り添う「授業改善」を図りながら「繰り返す」ことになる。

毎回の授業での振り返りを自分の言葉で考察する学びを通じて学生が成長し、変わっていく様子は説得力があるのではないかと。学生にとっても、保育者になってからも、「保育原理と自分の仕事」とのつながりを実感し、何かを判断する時の基準になっていくことが理解できよう。

あらかじめ、保育原理の専門的な手続きを経た研究ではないこと、数量的な分析を用いた研究ではないことを断っておく。

## 2 研究の方法

### (1) 対象及び方法

1 年次後期開講の卒業必修、資格免許必修、科目「保育原理」

受講生 37 名（女子 34 名、男子 3 名）

15 回の講義とともに、筆者の担当科目（日本国憲法、言語表現、人間関係）を科目間連携の観点で授業を展開する。

学生は、授業の「振り返り」を自分の言葉で「考察」できる力をめざす。さらに、授業では、「考察の共有化」を図り、学生個々の「考える力」を高めるための授業改善の研究を進めていく。

なお、授業の「振り返り」は「チャットメール」で提出する。

### (2) 倫理的配慮

本研究の性質上、学生の授業の振り返りを取り上げる。その際、学生には、氏名なしで情報を共有して学習する視点から研究参加の同意を得ている。

### (3) 当事者意識と「つなぐ力」を意識した授業実践

保育者として「考える力」を体得していくには、様々な事象に対しての当事者意識をもち、「関連させる（つなぐ）」習慣化が必要である。

授業改善にあたっては、科目間連携と逆向き学習法で授業を進める。

逆向き学習法とは、学生が入学し、2 年後に保育現場に就職する 4 月を想定し、必要となる資質能力に優先順位をつけ、学生の実態との相関を考えて授業展開していくものである。

学生によっては、同じことを繰り返していると思わせない「関連」を活用する視点の解説や授業展開に具体例を盛り込むことが重要である。なお、逆向き学習を進めるにあたって、個人差に対応するために「2 年間でトータルで指導する」ということである。

## 3 研究の実際

日々の授業は「P D C A」のサイクルを視野に入れる。常に学生の進捗状況を踏まえて教材

研究を重ね、授業を実践する。毎回、学生の「振り返り・考察」を勘案して授業改善を行い、教材研究と授業実践を繰り返し、学生に寄り添っていく。この授業展開システムはすべての教科に共通する。

保育原理の授業の始めには、日本国憲法の基本的人権（第 11 条）について取り扱う。なぜなら、基本的人権には「生存権や表現の自由などいろいろな権利が含まれており、保育者として子どもが尊重されているかを常に意識して自らを問い返し、学んでほしいからである。また、「生存権」（第 25 条）では、「子どもにとって『健康で文化的な最低限度の生活』とは何か」を意識して、子どもや保護者の生活に目を向けてほしい。このように、15 回を通して、人権をベースに置いた保育原理の授業を展開する。同時に、筆者が担当する科目間連携も学びの往還に取り入れる。

そこで、学生が主体的かつ積極的に学び、アウトプットできる専門性を育てるには、どのような授業展開が効果的であるかを具体化して取り組み、その効果を考察して次年度以降の授業に生かしていきたいと考えた。

### (1) 学生理解のための現状把握

学生に寄り添う観点からスタートラインはみな違うという認識でスタートする。

学科内での情報共有は当然として、個に応じた指導法の工夫には、日常の教員同士の情報の共有は欠かせない。本学の建学の精神である「学生に寄り添う」気持ちは、教員同士の共有から生まれることを忘れてはならない。

### (2) 自己覚知

次に、学生には「自己覚知」によって自分の現状について知ることを求める。

自己覚知とは社会福祉の中で主に使われる。しかし、自己覚知は関係の中で生きるすべての人に求められる姿勢であると考えている。よって、学生は、自分が見聞きしたこと、触れたこと、体験したことから感じる自分の受け止め方や反応の仕方でも自己を認識する機会にしたい。

犬飼らは「保育者養成校で学び、優秀な成績を収め高い保育技術・理論を持ってしても、日々向き合う子ども・保護者または保育スタッフとの親密な信頼関係を築くことができなければ、保育士として豊かな保育環境を創造する実践はできない。安定した養護と教育の効果を追い求めその手段・方法論を研究し成果を上げるには、並行してそこにいたる過程に目を向け、人と向き合う『自己』に気づく必要がある。なぜならば保育という行為を通じて子ども・保護者に向き合うことは、自分自身の身体を媒介として表出されるものに他ならないからである。」(3)と述べている。(下線は筆者)

多くの学生は各科目や情報等を関連させて考えることが苦手である。しかも、2年間という限られた時間で「答えの出ない問題」は、各科目などを関連させて考える力がなければ大学で学んだ保育の専門性を生かして自分の言葉で語ることは難しい現状にある。筆者の長年の疑問は「実践力を備えた即戦力となる人材育成だけを短大教育の目標」にしていいいのかということである。

日常の授業展開や教育活動では、学生が保育現場に出た時に最低限に必要となる資質能力を踏まえ問題解決法を考えていく「逆引き学習法」をとる。逆引き学習法とは、学生が入学し、2年後に保育現場に就職する4月を想定し、必要となる資質能力の優先順位をつけ、学生の実態との相関を考えて授業展開していくものである。その内容は、保育の専門性ととも基礎学力の補充も同時進行で取り組む必要がある。

### (3) 自己肯定感とシラバス・レベル

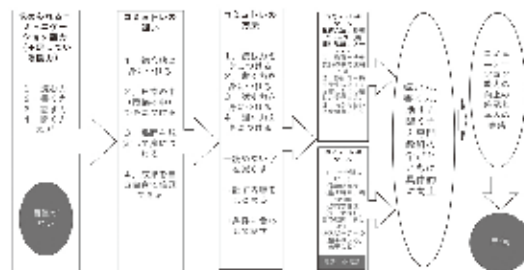
筆者が担当する科目間連携(日本国憲法、人間関係、言語表現、保育原理、保育・教職実践演習)の視点で取り組むものである。

筆者の「シラバス・レベル」の考え方は、「短期大学の今後の在り方」から考察した考え方である。

学生の個に応じた授業を実践するには、「卒業時まで学生に身につけさせたい力」と「教育する側」との関係を考えて時に、ディプロマ

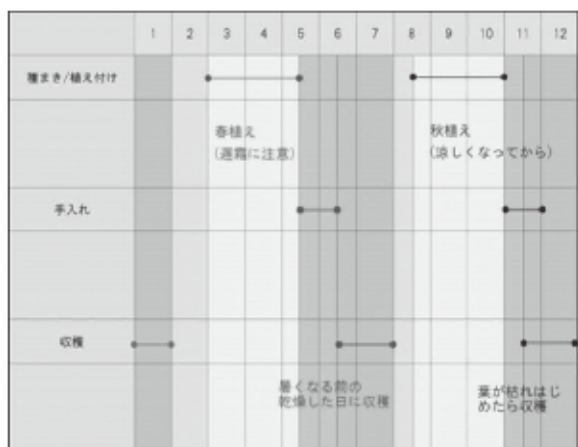
ポリシーとカリキュラムポリシーの関係になる。その時に、抽象度の高いディプロマポリシーでは具体的な内容は書かれていないので、それを身につけさせるための教育内容を示したのがカリキュラムである。しかし、そのカリキュラムも具体的な教科の内容についてはシラバスに表されることで具体化される。そのシラバスも時代背景や学生の質などなどによって内容を変え工夫をする必要がある。つまり学生理解が必要であり、対象となる学生に応じたシラバスを工夫しないとただ教科書に沿って進めるだけでは不十分であるということの意味している。多くの教員は対象となる学生レベルをとらえて、それに応じた授業に換えると思われる。ただし、学生の質に合わせてレベルを下げると学修成果やディプロマポリシーを果たすことは難しくなる。学力を引き上げ社会に送り出す時に必要な力を身につけさせるためにはその都度シラバス・レベルの工夫や変更が必要である。

専門的知識を体得するとともに、社会人基礎力についても学生には自信の回復と2年後を見据えた学習の重要性について、2つの図表から理解してもらった。



図一 「シラバス・レベルから導き出した自信回復の流れ」

もう一つは、図二「ジャガイモの春植え栽培スケジュール」からヒントを得た。収穫から逆算して、どんな準備をして、いつ種を植え、どんなお世話をすれば収穫にたどりつくのか等、見通しをスケジュール管理しなければならないことを通して考えた。



図一 「園芸家 深町貴子「ジャがいも栽培スケジュール」より

学生は「今回の授業で私が印象に残ったのは『ジャがいもの話』を通して先生が話された一年の見通しを持つということだ。もう大人になっている私でも一年の目標、それだけでなく一日の流れや見通しをたてないで過ごす時間を無駄にしてしまったなど感じて反省する日もある。保育園児はまだどのように過ごすなんて考えることはないだろうが子どもたちの毎日二度と戻ってくることはなく、貴重な時間を園で過ごす。その一日一日が新しい発見であふれていて成長の連続でしかないような日々であってほしい。それを手助けするための園や保育士であると思うので、一年、一日の見通しをたてて忘れずに過ごすということは毎日欠かさず保育士という仕事としてもやっていきたいし、1人の人間としてもそうしていきたい。保育士になる前から自分でも見通しを持つ癖をつけておくといいかなと考える。」と授業の振り返りのなかで考察している。

#### (4) 短期大学と「保育士試験」

授業では入職後を想定して、「学生のモチベーション」維持向上のために保育士試験についても解説した。保育士試験を経て保育者をめざすものは、受験スケジュールを自ら計画して、主体的に学ばねばならないことで、学生の意識改革を促すねらいがあった。

保育士とは、第18条の18第1項の登録を受け、

保育士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者という。保育士資格を取得するには、試験に合格しなければならないことも知る。

- ・保育原理の出題内容は、保育所保育指針（国の定める保育所の運営・保育指針）の内容
- ・子どもの養護に関する各種法令・国際条約など。日本国内／海外の保育・教育・子どもの養護分野の偉人。保育所での保育事例などが出題される。
- ・保育士の科目別試験は、保育原理・教育原理・社会的養護・子ども家庭福祉・社会福祉・保育の心理学・子どもの保健・子どもの食と栄養・保育実習理論である。保育士試験は、筆記試験及び実技試験によって行い、実技試験は、筆記試験のすべてに合格した者について行われる。保育実技試験は、音楽・造形・言語の3科目から2科目選択である。

例えば言語の実技試験では、子どもが集中して聞けるような「3分間のお話」の試験問題がある。あらかじめ発表されている課題のなかから、自身で一つを選択する。目の前に、20人程度の3歳児がいることを想定する。話を3分にまとめる。適切な身振りや手振りを加える。開始合図の後に、話の題名を子どもに向けて言う。絵本や台本、人形などを使用することは禁止。3分間は退出不可。子どもに見立てた椅子が前方にある。

保育士として必要な基本的な声の出し方や表現上の技術、幼児に対する話し方ができているかチェックされる。

これらを授業内容に盛り込み、自らを振り返る機会を設けることは、当事者意識を高める一つの方法となる。

特に、オリエンテーションでは当事者意識を高めるアクティブラーニングとして、「私の授業は、教壇を降りてみなさんと同じ目線に立ち、積極的に机間を移動し、学生と対話しながら授業を進めます。理論と実践をリンクさせながら問いかけ、意見を求め、解説を加えます。授業では、アットランダムに指名（適度な緊張感）し、

「自然体」で発言を求めながら『アドリブ』力（とっさの質問や急なスピーチなどにも対応できる等）も強化し、グループワークの中で『司会力』も習得する『双方向授業』です。

合わせて『社会人基礎力』の視点からマナーや言葉遣いの指導、時事問題の解説も同時に行います。特に、基本的な『学習の構え』を重視し、礼儀作法、姿勢、返事、反応、表情、メリハリ、リズムなどをベースに討論の仕方等、授業のすべてで『リアルタイム』に学んでいきます。一つの方法として社会人学生のキャリアにも大いに学びましょう。」と伝えるようにしている。

高山は「保育者の関わりには、判断の基準となる原則的な理論と、状況に応じた直観の両方が必要です。保育は複雑な状況のなかで、一人で判断しなければならぬときが多くあります。また瞬間的に判断し行動することが必要な場面ばかりです。このような職務であるからこそ、判断の基準となる原則（理論）と、共有化できる詳細な情報（専門知識）が必要です。」（4）と述べている。

### （5）学習の構えを作る

学習の構えは、小学校1年生から取り組む「起立の仕方」、「礼の仕方」などの立ち居振る舞い、「話し方」「話の聞き方」等を基本的な生活習慣・学習習慣として指導を行う。この学習の構えは、大学生でも身に付いていない。大学生であってもできていなければ指導していく必要がある。まして、社会人としては当たり前なのである。



また、教科であっても、「どこでつまづいているか」を見抜く力こそ、専門家としての教師であろう。保育者の正しく美しい言葉遣い、やさしく明るい表情、清潔で気持ちのよい服装、

穏やかな態度、立ち方、座り方から、何かに取り組む姿勢まで、広く言えば保育者の生き方そのものが、子どもに影響を与える。「相手に届かない挨拶（態度）をしていませんか？」と自己省察とともに、挨拶の「質」にこだわる力を育てたい。

さらに、筆者が、繰り返し指導していることは「辞書を引く」ということであるが。残念ながらなかなか定着しない。実習先で日誌の誤字脱字を指摘されても変わらない。どこに問題があるか。それは、当事者意識の欠如と、「共に保育者を育てる」という視点の不足こそ「現場と大学の乖離」の問題ではないか。

資料や教科書でも「辞書片手に読む」ことが文章上達の近道である。すべての教科で辞書を積極的に活用して文章を書くことを日常化した。使うかもしれないが、使わないかもしれない辞書こそ、使いこなすスキルまで高めたい。学生に授業の中で日々伝えることは、前期には、教育原理、保育内容総論、幼児理解、保育内容人間関係、言語表現、保育内容表現、日本国憲法など、後期には、保育原理、保育方法・技術、特別支援教育・保育1、社会的養護、乳児保育、保育内容健康、発達心理学、教育課程論、教職基礎論などを履修する。

そこで、学生には、各科目や情報等を関連させて考えることが苦手かもしれないが、2年間という限られた時間で「答えの出ない問題」に対応するには、各科目などと関連させて考える力がなければ大学で学んだ保育の専門性を生かして自分の言葉で語ることは難しいことを伝える。

ある学生は「昨日は別科目の勉強をしていた際に、『あ、この考え方は保育原理にも共通するな』『この視点は課題レポートにも用いて良さそうだ』と、考えや視点が次々に繋がっていく感覚が非常に面白くもありました。たしかに、すべきことが重なり悲鳴を上げたくなる思いがあるのは事実です。それでも逃げずに頑張っているのは、やはり『保育が面白い』からなのかもしれません。あと約一週間、精一杯取り組みます。」と授業の振り返りで考察している。

#### (6) 関連させて考えるためのグループワーク

リーダーを中心に、与えられたテーマについて、まずはそれぞれがテーマに関する自己の経験、感想、考察をノートに記入していく。その後、グループで個々の意見を発表し合い、自分のノートにグループ内全員のコメントをまとめていく。その中で意見の相違や総意を話し合い、まとめていく形式をとる。代表発表等で指名を受けたら、立って、全体に聞こえる声の大きさを意識する。「アウトプット」するには、しっかり聞かなければ、書かなければ（考えなければ）、まとめなければ（要約しなければ）、さらに、少しばかりの勇気も必要である。リーダーはまず雰囲気づくりに取り組む。

#### (7) 定期試験

事前に複数の記述式問題を提示して当日は2題出題する。「指針、辞書は持ち込み可」として実施した。問題に正対して「活用力」「繋いで考える」力を問うものである。

ある学生は「定期テストでは、1年間で学んだことを他教科とも照らし合わせて自分の意見を述べられるようにしたい。また、テストのためだけの勉強ではなく自分のために多面的な角度から学習したいと思う。」と振り返りで考察するようになった。

ある学生は「本日の試験について、文章を書くことはできたのでよかった。しかし、七つ道具（辞書等）を駆使して問題の答えにあった答えを書くことができなかった。ある程度構成を考えてはいたけれど、書き進めるにつれて書きたいことがまとまらずダラダラと書いてしまった。そこが課題だと気付いた。私はもっと問題の答えを簡潔に分かりやすくまとめる力をつけなければならない。日頃から習慣にしている新聞を読むことに加え、これからは大事なところに線をひき、簡単にまとめる癖をつけていきたい。」と授業の振り返りで考察している。

#### 4 研究の考察

各教科の入り口にあたる保育原理の授業を通して、物事を関連させて考える力の構築を目指してきた。特に他の科目との関連を意識させたことで学生がアウトプットとして、これまで紹介してきたような「振り返り」を自分の言葉で考えるようになってきた。

ある学生は「まず15回の講義で文章力を身に付けることができた」と心から実感している。それに加えてアウトプットも少しずつできるようになったのでよかった。自分自身も成長したけれどクラスメイトも格段に成長していると感じた。クラスメイトをみて更に頑張らなければいけないと学びの意欲に繋がっている。だから、仲間は大切な存在だと気付いた。2年の後期では短大での集大成としての学びをいかに自分のものにするかがポイントだと思う。だから、後一年、どの教科もしっかり学んでいきたい。」と授業の振り返りで考察している。

ある学生は「私自身、第1回目の授業ではどこか聞いているようで聞いていないという所があった。振り返りも、サラッと書けばよいと、どこかで思っていた。しかし、この15回を振り返ってみると、授業が楽しくて、振り返りも書きたいというよりも、私はこう考えていると考察まで少しずつだが出来るようになった。また『1分間アウトプット』にも挑戦して、アウトプットについても学ぶことができた。『ノンバーバル』を意識するところはまだまだなのでまた別の機会にチャレンジをしたいと思う。」と授業の振り返りで考察している。

ある学生は「今日は朝から、保育園送迎バスでの死亡事故がニュースで取り上げられていた。今まさに事例問題などを通して、憲法について考えている所ではあるが、身近で保育園での大きな事件が起きてしまった。またこの事件から、憲法と、どうかかわっていくのだろうか、保育者になる私達にとっても、目を背けてはいけないニュースだと思い、朝から見ていた。とても悲しく、絶対起こってはいけない事件だっ

たと思う。また、現場にいた保育者は点呼確認をしていなかったのだろうか、様々な事が頭を過る。本当に胸が痛い事件だと思えば朝から見ていた。だから、後一年、どの教科もしっかり学んでいきたい。」と授業の振り返りで考察している。

ある学生は「事例問題に対して正直に言うと苦手意識がある。どんな風を書いていいかわからず、戸惑ってしまう。しかし今日は、グループのメンバーの意見を聞くと、自分の意見を出すことができた。私は司会だからといって1番に意見を言わないといけないと思ってしまう癖がある。それがプレッシャーになってうまく自分の意見をまとめられないというのが今の課題である。だから、もっとグループのメンバーを頼って質の高い意見を出せるようにしたいと思う。」と授業の振り返りで考察している。

## 5 まとめ

ある学生は「今日発表している方々を見てどんどん差がつけられていると実感した。私は答えのない問題が苦手な正直、保育者に向いているか、なれるのか、不安でいっぱいだ。本当に保育者になりたいと思って入学したのかとまで思うこともあって、そう思う自分が嫌になってしまうこともある。こんな弱音ばかり言っても何もならないと思うので、ここに来たからには1つでも多くのことを学んでいきたい。」と授業の振り返りのなかで考察している。

短期大学は、保育者としての専門性を身に付けた学生を送り出すことが使命である。年度当初に教員が「どんな学生を育てるのか」の目的意識をもって、各教科の科目間連携、授業の振り返りを学科会や共有メール等での情報の共有によって質はより高まるであろう。最近、短大の4大化の動きを考えるようになったが、保育園・幼稚園の実習先訪問では、4大卒業の保育者と短期大学卒業の保育者を可能な限り参観するようにし、日々の授業に生かすように努めてきた。残念ながら、どれだけ、短大の存在意義を確認しても、おそらく4年生大学への流れが

止まるわけでもない。しかし、短大は送り出す学生の質を4年生大学並み、またはポテンシャルを持つ学生に育てるところに来ているのである。

## 【参考文献】

- (1) 多田陽子・関谷みのぶ『『自ら学ぶ』ための短大2年間の連続した保育者養成—協同学習の視点からの考察—、教育保育研究第 3号、2017pp51-61
- (2) 中央教育審議会大学分科会大学教育部会短期大学「短期大学の今後の在り方について（審議のまとめ）」2018年
- (3) 犬飼己紀子他「保育者として自己覚知の必要性～グループワーカーとしての保育者像～」上田女子短期大学紀要、
- (4) 高山静子「改訂 保育者の関わりの理論と実践」郁洋社 2021
- (5) 池田隆英他「なぜからはじめる保育原理」建帛社
- (6) 市川伸一「学ぶ意欲の心理学」PHP新書、2011
- (7) 金子元久「大学の教育力」ちくま新書、2007
- (8) 茂木健一郎「質問力」河出書房新社
- (9) 小川博久著「保育者養成論」萌文書林、2013
- (10) 岡田耕一「保育原理」萌文書林、2019
- (11) 佐伯一弥「Workで学ぶ保育原理」わかば社
- (12) 神冥幸子他「生活事例からはじめる保育原理」青踏社
- (13) 小田豊「保育原理」大学図書出版
- (14) 全国保育士会研究紀要委員会「保育研究の考え方・すすめ方」